

「講演記録-「中国の悲劇とその行方-1989.06.20

講演記録

「中国の悲劇とその行方」

東京外国語大学教授

中嶋 嶺雄氏

広島県日中親善協会

刊行にあたって

広島県日中親善協会

広島県日中親善協会は、昭和五十九年九月、広島県と四川省との友好提携締結と同時に設立され、民間交流の窓口として諸活動に取り組んで参りました。この間、両県省の交流は各分野にわたり活発になり、年をおうごとに広がり、深まりをみせております。

今年は、友好提携五周年という記念すべき年に当たり、四川省人民政府代表団をはじめ多くの要人が広島を訪問され、また、広島からも各界の方々が四川省を訪れ、幅広い交流と対話が図られております。

当協会におきましても、五周年を記念し、四川省歌舞劇院を招聘して県内各地で公演を行いましたほか、記念講演会を開催するなど文化事業にも力を

入れております。とくに、六月二十日、海外事情研究家として高い評価を受けておられます東京外国語大学教授の中嶋嶺雄先生をお招きしての講演は、大変好評をいただき会員の方々からぜひ講演記録を配布してもらいたいとの強い要望がありました。

中嶋先生には、ちょうど五月中旬の中ソ首脳会談に引き続き、六月上旬の北京を中心とした不幸な出来事に関しまして、連日のテレビ出演など大変お忙しい中をご無理を申し上げたうえに講演録の刊行にも快く承諾いただき感謝いたします。

この冊子が中国の現状認識と今後の交流の推進に役立てば幸いと存じます。最後に、平素から当協会に対します

会長 徳永幸雄

各位の暖かいご支援に厚くお礼を申し上げますと同時に皆様方の一層のご発展を心から祈念いたします。

平成元年十一月

多くの入びとの予想を超えて拡大して参りました。そして、このような流血の事態に到るといふことは、もちろんそこに参加した学生や市民、知識人達も予想していなかったと思いますが、今の中国の当惑も、当初から予想していたとは言い難いものがございます。

戒厳令が施行されたのが五月二十日の午前十時であります。軍を動かすことができません、その後も状況が内部的に膠着状態に陥っている中で、五月二十四日に

「中国の悲劇とその行方」



天安門広場の大惨劇

ただ今御紹介いただきました中嶋でございます。

広島県日中親善協会が活発な活動を続けていらっしゃることを、かねがね敬服しておりましたが、私が講演を最初にお引き受けした時のテーマは、この五月中旬の中ソ首脳会談についてでした。とこ



ろが、御承知のようにこの六月三日の深夜から四日の日曜日にかけて中国では建国以来、あるいは中国の歴史にも、そして、社会主義諸国においても、ありうべからざるような大惨劇が起こったわけです。

武力鎮圧と恐怖政治

そこで今日は、この問題を中心に私が考えておりますことを率直にお話しさせていただきますと思います。

そもそも今回の民主化要求のデモは、多くの人びとの予想を超えて拡大して参りました。そして、このような流血の事態に到るということは、もちろんそこに参加した学生や市民、知識人達も予想していなかったと思いますが、当の中国の当局者も、当初から予想していたと言いたいのがございます。

戒厳令が施行されたのが五月二十日の午前十時ですが、軍を動かすことができず、その後も状況が内部的に膠着状態に陥っている中で、五月二十四日に

は今回のあの血の惨劇の実行部隊長になった楊尚昆国家主席が重要な演説をしているのですが、その時点ではまだ軍の介入というところまで決断がついていなかったという雰囲気を感じることができません。そうしますとその後はどうしてあのうよな動きになったのかということが分析の対象になりますし、そもそもなぜ戒厳令が施行されたのかということも重要なテーマになると思います。もちろん、今日の中国の状況は、いわゆる強硬派が武力によって鎮圧したのみならず、さらなる逮捕、摘発といういわば恐怖政治を断行しているわけでございまして、すでに一万名のブラックリストが作られているというような、かなり高い確度の情報があります。さらにそれを大きく上回る百万人規模の逮捕、摘発が行われるのではないかという推測さえあります。

それからもうすでにかなりの人達が処刑されているのではないか。こういうことをして中国はどこまで現在の体制でもち

こたえるのかどうか。ポスト鄧小平という時代もいよいよ時間とともにせまっているわけですから、それらのことを考えますと、やはり依然として事態は予断を許さない、流動的な状況にあるということとをまず申し上げざるをえないと思います。

中国を牛耳っている四川閥

それらの問題についての私の分析をこれから申し上げるんですが、日本のマスコミが一言も伝えていないことがあるんですね。おそらく私が今日言うこと、広島県で言うことが最初ではないかと思うんですけれども、しかも、広島県は四川省と姉妹関係にあるというんですが、実は意外に気づかれていないことがございます。あるいは皆様は四川省と関係があるから気づいていらっしゃるかもしれませんが、まさに、今回の強硬な事態を突破したその黒幕である鄧小平さん、そして軍の実行部隊長になって、今、中国民

衆の恨みをかっている、そして国際世論の厳しい指弾を浴びている楊尚昆国家主席兼中央軍事委員会副主席兼秘書長、そして、これらの鎮圧、武力行使を、行政面において裏書きした、つまり制度化した李鵬首相、彼らはいずれも四川省出身なのです。つまり、今の中国の血塗られた政権というものは四川閥であるという、これまた極めてユニークな特徴が表れているわけでございまして、気がついてみたら、今の中国は四川省の出身者が牛耳っている。だから、四川省と姉妹関係を結んでいる広島県の皆様にはとりわけ関心や興味の深い点ではないかと思います。

世界各国の厳しい批判と反響

さて、さき程も徳永会長から御紹介いただいた時に、日中友好という大きな課題をつきつけられたような気がいたすわけですが、日中友好特に広島県にとっては今回この問題をどう考えるべきか、非

常に難しい状況でもあると思います。つまり、今の中国は、こういう事態を冒したことによって国際世論の批判も厳しい。アメリカも厳しく批判しています。カナダやオーストラリアは大使を召還する。そしてフランスのミッテラン大統領は「中国には未来がない」という。そして中ソ首脳会談を終えたばかりのゴルバチョフソ連書記長も、非常にとまどいながら、慎重な表現ながら今度の事態に対してかなり批判的なコメントをすでに発表しております。

東欧諸国では、御承知のようにポーランドが、まさに中国のあのような事態が起きている時に、いわば下からの民主化が成功しはじめて、ワレサ連帯書記長が率いる野党が選挙では圧倒的な勝利を得た。ひょっとすると四年後の自由選挙が行われる時にはポーランドは初めて、下から共産党の独裁体制が崩されていくのではないか。その時に、ソ連のゴルバチョフ書記長は、今のペレストロイカや

民主化を進めている建て前からしても、ブレジネフのやり方を批判している建て前からしても、かつてのチェコの「プラハの春」の時のように軍隊を導入して、ひょっとするとポーランドの社会主義権力が崩れていくのを押さえることはできないでしょう。ということになると、もう一つの大きな実験がポーランドでは始まっている。そのポーランドは当然のことながら与党の軍事政権のヤルゼルスキー国家評議会議長を含めて、中国の事態に極めて厳しいコメントをしております。ハンガリーは、いよいよ複数政党制になりました。こういう成熟した東欧諸国が一斉に中国を批判していることはいうまでもありません。

そうした中で中国の事態を擁護している国にどこがあるか。今ソ連の人に言わせると、非常に眉をしかめる国であるところのルーマニア。ゴルバチョフの物差しによっても非常に硬直していると思われる東ドイツ。そして、北朝鮮。こうい

う国が中国の事態を支持しているんですね。いずれも大変な軍事強権体制、独裁体制をとっているところであります。

こうなりますと、日本がもし日中友好の建て前、特に四川省ということから、今の中国の権力の側とだけ友好関係を結ぼうとすることになりますと、日本は、まさにこういう世界の中で最も強硬な独裁体制をとる国と軌を一にするということにもなりかねない。そこに今日の大きなジレンマがあるような気がいたしました。これは、一広島県のみならず、日本外交の問題として考えても、今外交当局は非常に窮地に陥っているわけです。

アメリカ大使館に保護を申し出ている方励之夫妻。どういうふうにかこの問題が処置されていくか。ことと次第によっては米中関係が著しく悪化することもありうるかもしれない。アメリカは一人の知識人夫妻の人権のために、国益をも犠牲にする、そういうまさにデモクラシーや自由ということの原点に立ってい

る国でありますから、その点は非常に厳しいものがあるような気がいたします。

「血の日曜日」の背景と経過

さて、そのように考えてみますと、中国の事態は私共にとっても決してよき事ではないと思うのですが、まず今回の民主化要求の運動がなぜあそこまで大きくなったのかという点から入っていきいたいと思います。

破綻していた経済

これは、色々な要因がもちろんございます。しかしながら、なんといっても一番根本的な背景にあったのは、中国が改革と開放の政策をこの十年間進めてきたにもかかわらず、経済がうまくいってなかったということです。もしもみんなの経済生活が向上して社会的に満足していたならば、あのような民主化要求、そ

して単に民主化要求じゃない、皆さん御承知のように「李鵬さがれ」、「鄧小平引退せよ」と大変な勢いで盛り上がったのですが、ああいう事態は起こらなかったはずです。

中国でデモに立ち上がるとか、何か政治的な発言をするということは、日本で署名運動やデモに行くのと全く状況が違うんですね。ひょっとすると自分の一生を棒に振るのみならず命をかけなければいけないということが分かっているにもかかわらず、あれだけの学生達が立ち上がった。その背景には、現在の体制に対するものすごい不満と苛立ちがあったのです。この不満と苛立ちは、特に経済の開放や改革と言いながら、その受益者はほんの一握りの層でしかなかったという問題です。

たとえば、農村の万元戸。それは大いに奨励されたのですが、誰でも万元戸になれるわけではない。平等な競争原理の中で富を蓄積することには意外と中国の

人達は寛大なんです。しかしながら、日本でもリクルート事件の背景にあったと思いますけれど、一部の人だけが平等の競争原理と全く違う特権によって富をつくる。既得権だけで富が強くなっていくということが今の中国の現状なんです。万元戸だって、都会の近くの農村で家族も多いとか、地味がいいところを持つっている農民は、換金作物をどんどんつくったりしてお金をどんどん稼ぐことができる。しかしながら、辺境の田舎の、しょっちゅう洪水があるようなところに土地を持っている人達は、一生かかったって万元戸にはなれないわけですね。

目にあまる党幹部の特権行為

それから今の共産党の幹部の特権が言われましたけれど、これもまさにそうです。今回の北京大学の学生達が貼り出した壁新聞の写しがありますが、「見よ、現在の国家は誰の家の天下であるか」と

書いて具体的に告発している。党の幹部が一族郎党でもって全部いい役職を占めているわけですね。これは鄧小平さん自身の御子息である鄧樸方さんも、御承知のように文革で犠牲になって、中国身障者協会の理事長ですけれども、「身障者運動をダシにしてものすごい不当な蓄財をしているじゃないか」と批判されている。彼はこの間、あまりにもひどいんで国務院と党中央がその貿易業務の停止を決定した康華発展公司という、まさに今の中国が開放と改革の政策の目玉商品としてつくったような、政府と企業が結びついた一種の総合商社、コングロマリットの理事長でもあるわけですね。そこで、親父さんが鄧小平だということで、東海艦隊の軍艦を払い下げてもらって、アメリカに数十億米ドルの蓄財をしたとか、スイスの銀行に数十億米ドルの貯金をしているとか、そういったことが色々と今度出てきたわけですね。考えてみると鄧小平さんの娘さんとかなんか皆、い

いポストについている。そういう会社を牛耳ったり、党の幹部になったりしている。李鵬一族がやっぱりそうなんです。楊尚昆氏に至っては、今度明らかになったことは御承知のように、人民解放軍の総参謀長、総政治部主任あるいは二七軍の軍長、皆自分の弟や娘婿や甥の一族郎党で握っていた。こういったことが明らかにって参りました。これは何も、いわば強硬派の指導者だけじゃなくて趙紫陽さんにおいても、そうだったんです。長男が開放政策の中で注目されている海南島の華海公司の副総裁で、長女は北京の長城飯店の副支配人であったとか。皆そういう状況になっていたんですね。日本となじみの深い亡くなった葉剣英さんなんかも、息子が広東省の省長であるとか。リストアップしてみるとそういう状況がありまして、これはまさに中国では「太子」でもって特権を享受しているというような問題が一方非常に目立ちました。

インフレによる生活苦

そうした中で一般民衆の生活は、非常にこのところ厳しかったと思います。御承知のようにものすごいインフレ。昨年は二十八パーセントという政府統計でありますけれども、今年は一月から三月までの第一・四半期だけで二十八パーセントのインフレになってしまった。二重価格制度をとってますから、これに自由市場における物価の上昇を加えて平均すると五十パーセント前後のインフレです。品目によっては二百パーセントという値上がりですね。皆さん中国に行って茅台酒を買う。昔は茅台酒なんていうのは、私が香港に昔いた頃には千円位なものでしたけど、今では、三万円ぐらいですよ。何十倍にもなっている。そして、一般の人達の生活はほとんど収入が増えない。一部の外国と接する人達や共産党の幹部とか、そういう特殊な人達だけしか太っていない。

こうした状況が一般的であったと思います。特に、中国の場合、インフレの原因には色々あるわけですが、御承知のように鄧小平さんが人民公社をやめちゃえと言って、一九八四年ぐらいに人民公社がなくなりましたね。皆さん中国というところの人民公社、長い間中国の農村は人民公社によって象徴されてきたわけですが、その人民公社も今なくなりました。そして生産請負制、つまり民活化とか私有化を行ったわけですね。そして農村は活性化し、農民は一生懸命働くようになりましたけれども、そのために鄧小平さんは一方で農産物統一買付価格を品目によっては数十パーセントも引き上げているわけです。農民にアメをあげた。そうすれば当然それは、大変な国家財政の赤字になります。日本で米価をちょっと上げただけでも大変な赤字になるわけですから。その赤字になった部分をどんどん人民元を刷ってたわけですね。人民元というのは御承知のようにハードカレ

ンシーではないからいくらでも刷ることができる。そうすると人民元の価値がどんどん下がってきますね。今中国の人民元は実に価値がない。深圳の経済特別区あたりに行ってみてください。もう五、六倍公定レートより人民元をたくさん出さないと香港ドルが買えないくらいの状況です。それでも闇ドルを皆買おうとする。外貨兌換券を皆ほしがる。

これに加えて、御承知のように中国はものすごい外貨不足なんです。ですから外貨獲得政策に一生懸命になりました。趙紫陽さんのやってきた沿海地区発展戦略というのも、要するに一口に言えば外国の企業から技術と資本を導入して、そして中国は土地と建物と労働力を提供して、そこで作った製品を水際作戦で外に売って外貨を稼ぐという政策なんですね。ですから日中関係にはビジネストラブルがしょっちゅう生じる。日本の企業が中国に行く時には、何とかして中国に売りたい。中国市場をマーケットにした

い。中国はそれでは困る。外貨を稼ぐために、国内に入れないで外に出してほしい。それではブーメランになるわけですから、そういう根本的な利害の対立も実はあるわけですが、そうした中で、中国は色々やってきたけれどもなかなか外貨を稼げない。そこで、深圳や上海には外貨調整センターと称して国家自身がヤミをやる機関がある。つまりたくさん人民元を出して外貨を獲得するわけですね。人民元はどんどん刷ればいい。毎年刷ってる。対前年比通貨膨張量が約三十パーセントから四十パーセント近くずっとなっているわけです。中国中にいっぱい人民元が出まわって、インフレになるのは当然ですね。急ぎ過ぎた経済改革のため経済開放のために、西側からの影響はどんどん入ってくる。しかしながら中国の経済の基盤は良くならない。そしてもの凄いインフレ。中国中がいわばヤミ市経済みたいになったんですね。外から見ると一見活気はある。ましてや中国人は、

一度経済が開放されると皆いろいろな工夫をしたりして、小商売をやるのがうまい。社会主義なのかどうか分からないような状況がいっぱい出てきてしまったわけです。しかしながらそうした中で、民衆の欲求不満は非常に募りました。一部の者が、ヤミ市経済の中でうまくやって儲ける。だけどその儲かる人は一部ではない。こういう状況が一方にあったと思います。

交通・通信網等基盤整備

の遅れ

そして他方では、中国社会にモビリティが出てきた。もともと中国は水平運動をしょっちゅう民衆がやっている隙間社会なんですけども、それを共産党で縦割りにしようというのが無理なんですね。そういう隙間を利用して地縁、血縁のネットワークを利用して民衆はしょっちゅう移動したり、ちょっとしたいい情報、金儲けになる話になると

ワーツと殺到する。それをいわば開放政策といって許したために、御承知のように、例えばこの春節（旧正月）のあとで広東省の省都である広東には、二百数十万の農民が田舎からワーツと出て来るとかですね、毎日数千万の民衆が動いているんです。ところがトランスポートेशन（輸送機関）は旧態依然ですね。ですから、皆さんお仕着せの観光旅行やバック旅行じゃなくて自分で中国を旅行してみると分かりますが、私今年の夏そういう旅行を試みましたが、汽車に乗る、地方に旅行する、電話をかける、切符を買う、もう死物狂いですね。飛行機だって、例えば広東から北京までの飛行機の切符だって買えやしない。中国語ができて、現地の状況に通じている者だって買えません。では、日本でもって個人で北京と広東というような幹線ルートで飛行機が事前に予約できて買えるかというと、それは絶対にできない。それが現状です。現地でも買うには結局裏から手

をまわさなければならぬ。普通の一般の庶民だって大変です。ですからもう汽車に乗ることだけでワーツと大変な混乱です。けれども何としても都市に行きたい。だから中国中がものすごい混乱を極めているわけですね。高知工芸高校の事故などは、これはまさに起こるべくして起こった事件である。そういう状況の中で殺到するあの中国の人の群れを見ると、命というものがいかに軽く扱われているか、そういう潜在的な社会的土壌があるんじゃないかとさえ思えます。ですから、鄧小平さんは当初から「二十万ぐらい死んだっていい」とか、楊尚昆さんもそういうことを言っていたとか、「百万、二百万の流血がなんだ」というような指導者の言葉が出てくる社会的、政治的環境があるんですね。

就職難と低賃金

こういう状況ですから、中国はどこに火をつけてもワーツと燃え上がる雰囲気

にあったと思います。それほど色々な問題があった。そして特に学生達の不満は大きかった。自分達は大学を出ても就職する目途がない。思うところに就職できない。北京大学はようやくにして国家配分がなくなって、自分達の意思で就職できるように昨年からなつたはずなんだけど、それもうまくいかない。そして今度は地方の大学などは国が面倒みてくれないから、就職先も保証されないと多い。知識人などの給料は本当に低いんですね。普通だいたい百五十元〜二百元くらいとみればいいんでしょうか。日本円にすると四〜五千円くらいのもの。だけれどさっきのような物価の上昇では本も買えない。こういういわば潜在的な状況が背景にあったことを考えないと、今回の中国の事態は理解できません。

よく日本のエコノミストなどやあるいはシンクタンクの人達が、中国について、特に中国の経済が開放と改革でうまくいっていたなんてことを言う人があ

る。私から見ると、それはいったいどこかの国のことを話しているんだろうかと思うことがしばしばでした。特に銀行の人は、やっぱり今日の日本の銀行は金余り現象ですから、なんとか中国に融資しなければならぬんですね。また、中国と取引する企業に大いに融資しなきゃいけないから、中国の経済はうまくいっているとか、そういうことを言っているんじゃないかとさえ思うくらい、私がこの目で見、毎日研究している中国と、それらの一部の甘い幻想で中国を見ている人の中国との間には違いがありました。たしかに北京に行って、いいホテルに泊まっていれば、中国もよくなったと思うでしょう。だけれどそこは普通の中国人は入れないんですね。我々が北京に行ってホテルに泊まれば、一泊、まあ長城飯店のような一番いいホテルでも一泊五百元ぐらいですから、日本円に換算してもたいたことない。二万円でおつりがくる。一番いいホテルに泊まってそれなら

安いじゃないかと思うけど、中国の人にとって一泊五百元なんて金額は、さっき言ったように、月給の半年分くらい、五、六か月分出して一泊泊まることになるわけですから、日本でいえば、このグランドホテルに一泊百五十万円くらい出して泊まる外国人ということになりますね。そういう世界だけを渡り歩いて、ちよつと観光地を二、三步いて帰ってくれば、ああ中国も近代化してよくなったと思うでしょう。しかし、それは中国の中のショーウィンドウのまたスポットライトを浴びている部分をちよつと見て来るに過ぎないわけで、それでは、あの中国の人達の不満や苛立ちが分からないんですね。これはものすごいものがあったのです。

徹底した経済引締め政策

こういう背景の中で、実は昨年の秋の中国共産党の三中全会、今十三期といっています、その三中全会で、経済の引

締めが決まったんですね。そして、例の趙紫陽総書記が鼓吹してきた沿海地区経済発展戦略なども、全くそれに言及されなかった。そこへもってきてこの三月から四月にかけての全国人民代表大会で、去年の秋には二年と言われたけれども数年もしくはそれ以上に亘って徹底的な引締めをするということが李鵬首相の指導によって決まったんですね。これがやっぱり大きかったと思います。改革、開放といひながら貧富の差は増大するし一部の特権者だけが良くなって、あちこち社会は混乱の極に達しているという不満や苛立ちが多い。そこへもってきて、今度はものすごい引き締めです。それでは肝心の政治改革とか民主化とかはおおよびもつかないと学生や知識人の恨みをかったんですね。これがまず一つの潜在的な背景です。

立ちあがった知識人

それからもう一つは、今年は御承知の

ように五四運動七十周年、建国四十周年です。この五月四日をめぐってすでに一月あたりから今アメリカ大使館に保護されている方励之氏^{ほうれいし}なんかを中心として知識人達が政治犯要求の民主化運動、人権擁護を盛りあげていました。謝冰心^{しやうへいしん}女史なんか日本にもなじみの深い作家でありますが、彼女達も含めて多くの知識人やジャーナリストが色々なかたちで公開書簡を発表して中国当局に民主化を求めた。ちょうど十年前の「北京の春」の時に、壁新聞を貼ったり、雑誌を出したというだけで十五年の刑期を負って獄中にある魏京生、こういう反体制知識人の釈放運動などをやりました。これが第二の背景だったと思います。こういう状況の中で胡耀邦さんが四月十五日に死んだんです。

胡耀邦さんの死と

趙紫陽氏の限界

胡耀邦さんの死に対しては御承知のよ

うに、彼は四月八日でしたが、政治局会議の最中に議論をしていて興奮のあまり倒れてしまった。中国人の場合よくそういうことがあるんですね。これを「氣死^{きし}」といいます。興奮してしかも彼は趙紫陽ともやりあい、李鵬らほかの人達ともやりあった。胡耀邦さんにいわせると今党内は党風が紊乱している、ということとで彼はものすごく怒ったそうです。もう彼は失墜してしまいましたから何でも自由なことを批判しようという気があったんでしょうね。そのあまり興奮して倒れた。そして十五日に亡くなりましたね。こうして憤死した胡耀邦にたいして当局の扱いがよくなかったと思います。たまたま李鵬氏は、広島にも来たんでしょうか、瀬戸大橋を見に中国地方にいたわけですね。東京での竹下さんとか天皇陛下との公務が終わっているにもかかわらず、予定をくりあげて帰国するでもなく、そのうえ日本で彼が発表したステートメントは非常に冷たいものでした。や

はり胡耀邦さんは前総書記、つまり共産党の最高指導者であり、現政治局員です。長い間の彼の経歴を考えれば、李鵬氏は敬意を表する意味で日程を変更して、すぐに帰るべきだったんですね。ところが帰りもせずに、しかも日本では彼に対して非常に冷たい扱い、つまり「胡耀邦は完全に過去の人だ」というようにとれる談話を発表しました。これが学生達を非常に刺激したんですね。学生達のデモの中にも「李鵬の滞日中の発言はなんだ」というスローガンがありました。

このあたりから胡耀邦追悼の意味で学生達が少しづつ動き始めます。そして、十八日にはあの中南海、幹部・要人が住んでいるところの表に新華門という門があります、そこに北京大学の学生達三千名がデモをかけましたね。李鵬批判です。それから鄧小平氏に対しても批判が始まった。ここで官憲ともみあったわけですね。このあたりからデモが一挙に拡大していく様相を見せました。

ところが、それから事態を見ておりますと、天安門広場に今度はどんどんデモの輪が広がっていったわけでありますが、学生達は趙紫陽さんに加担するためにデモをやったんじゃないんですね。やはり一つは五四運動ということもありましたし、とにかく民主化要求をきっかけで、色々な要求を出したわけです。言論の自由とか、もっと政治的発言を許すべきであるとか。六項目要求、七項目要求を出した。ところが、それに対して当局はこれを拒否する。そうこうしているうちに、四月二十五日に鄧小平氏は、党の中枢において、「学生達の動きはなんだ。これは動乱だ。こんなものを許しては大変なことになる」という演説を行いました。その演説が基調になって、二十六日、「旗色鮮明にして必ずや動乱に反対せよ」という人民日報社説となったのです。学生の動きを「動乱」と規定したわけですね。このあたりから学生達はますます党中央のやり方に怒った。

その間にあったのは胡耀邦さんの追悼式です。これは二十二日にありました。二十二日に追悼式があったんですね、趙紫陽氏は弔辞を読んだにもかかわらず、胡耀邦氏に対する十分な政治的評価をしなかった。学生達はまた非常に不満である。まあ趙紫陽さんとすれば、それには触れにくかったんでしょう。彼は今でこそ改革派の旗手として同情されているわけですが、胡耀邦さんを追い落とした二年半前の胡耀邦失脚の時には、趙紫陽氏は鄧小平と一緒にあって胡耀邦追い落としに加担したわけですから、自分としてはそのことに触れにくいですね。

そういうようなこともあり、彼が亡くなる前には胡耀邦と激論したともいわれる。ですからこれらのことがありまして趙紫陽氏は追悼式の後、彼も状況認識が甘かった、北朝鮮を訪問しちゃうわけですね。北朝鮮に行っている間に、あの「動乱」規定の人民日報社説が出るわけです。そして彼は月末に帰って来て、あ

まりにも厳しい、学生達の運動に全然耳を貸さないような動乱規定を修正するよう呼びかける。それが鄧小平氏との間にますます対立を深めるという結果になります。

五・四運動70周年記念

さて、そうこうしているうちに、五月四日の五四運動七十周年記念があるわけです。この日は一つの盛り上がりの中のピークだったと思います。これは御承知のように、ADB、アジア開発銀行の総会が開かれた日でもありました。このアジア開発銀行の総会は、非常に注目すべきことに、建国四十周年にして初めて台湾から公式な代表が郭婉容^{かくえんよう}女史を団長として参加した。郭さんは今大蔵大臣、財政部長ですけれども、日本の神戸大学で学位をとっている台湾の本省人でいながら非常にすばらしい才媛です。人柄も非常にいい人ですが、李登輝^{りとうき}さん自身が台湾の本省人出身の開明的な指導者であり

ますが、その彼の信任があつた彼女を団長として一九四九年以来初めて代表団が中国に行ったんです。ですから、台湾、香港、アジアから随分ジャーナリストが来てました。そういうこともあって、学生達は随分盛り上げましたね。しかしながら、二十万近くのデモになりましたけれども、それで一応事なきをえたわけですね。しかし、このアジア開発銀行総会での趙紫陽講話は、学生運動を愛国的なものだとして「動乱」という党中央の方針にみずからそむき、運動を煽ったと、激しく非難されています。

学生のハンスト突入

次いで学生達はその後に五月十三日からハンストに入ります。ハンストに入るととたんに運動の性格が非常に変わって来たような気がしますね。非常に今度は庶民の同情が膨らんでいきます。ハンストというのは「絶食」と書いてありましたがね。皆さん、テレビでごらんになった

でしょう。日本人はハンストっていうと、あんまり感心しない。やっぱり中国人とそこに感ずるイメージは根本的に違うんじゃないかと思えますね。日本人と中国人の間には色々な差がありますから、そういう違いを大事に見ておくことが必要なんですけれど。中国人は食の文化の民族ですから、非常にに食べることは貧欲です。広東人なんか特にそうですし、四川省もそうですけれども、何でも食べてしまう。その食べる文化、あれほど食べることにこだわる。日本料理なんか、中国料理のあの深さとバラエティーに比べたら、本当にいわば単純なシンプルなものですよ。それが、食を絶つということがもたらす共感と同情。これは日本人の世界ではちょっと想像できない。ハンストがまた非常に共感を呼んだんですね。

中ソ首脳会談のドラマ

そうこうしているうちに、五月十五日

のゴルバチョフ訪中になったわけです。これは御承知のように世紀のサミットでしたね。世界から千名を超すジャーナリストが詰めかけて参りました。で、ここで学生運動がさらに大きく盛り上がってきたんですね。そして百万の規模のデモが、あれよあれよという間に天安門広場を取り巻きました。そして御承知のようにゴルバチョフ氏は北京に着いた日に、天安門広場で歓迎式典をやるはずなのがそれもできなかった。しかもゴルバチョフ氏はまさに民主化の旗手として学生達に歓迎されたわけです。

献花もできなかった国賓

翌五月十六日中ソ首脳会議が行われた。しかし、中国に行く外国の元首は誰もがやるように、あの人民英雄記念碑で献花しようと思ったけれどそれもできない。記者会見の場所も急遽、迎賓館に変えなければいけない。彼自身のスケジュールはずたずたになる。そしてゴル

バチョフ氏にとっては皮肉なことに、彼は訪中に先立って、「私自身も初めて訪中するんだから是非中国の偉大な文化、遺跡を見たい」と言っておきながら、まさに北京のシンボルである故宮博物院、つまり旧紫禁城をも一步も訪れることができずに天安門広場そのものにも入れずに彼は帰ったんですね。広島に来て原爆ドームを見ないで帰るようなものです。

しかも広島島の平和を祈願し、「自分は広島島の惨劇を繰り返さない。」と言って来た人が、広島に来て原爆ドームを見ることもできなかったと同じように考えたら、これは大変なことであった。

しかもこのあたりから、御承知のように党中央における亀裂が色々なかたちで目立ってきたわけです。もともと、私が言ってきたように今の中国共産党には、保守派と原則派と改革派という三つのグループがありました。保守派ってのはもう非常に頭の硬い人達ですね。胡耀邦失墜の時にはこの保守派の鄧力群、胡喬木

らの非常に古いイデオログが出てきて、いわば原則派、つまり社会主義の原則は絶対を守るべきだという、李鵬さんやその上の陳雲さんなんかと一緒に、胡耀邦といういわばはみ出した改革派をやっつけてしまった。本来鄧小平さんは改革派のはずなのに、彼は危なくなるとさっと身をかわしてしまった。ある意味では非常にズルイ、そして自分の忠実な弟子であったナンバー2、まさに一身分体であったはずのナンバー2を切ってきたわけです。そしてその後に趙紫陽氏を据えた。結果的に今回も趙紫陽氏が第二の胡耀邦になる運命であるように今思われるのですが、いつもそういう対応をとってきた。

こうした党中央の亀裂が非常に目立ってきました、何かそういう状況になると、保守派が非常にまた台頭してくる。つまり革命第一世代の本当に頑固な人達ですね。これらに対して今の若者の考え方というのは、例えば憲法に基づいて政

治をしるか、党規約に基づいて政治をしてくれている立場なんですね。だから非常に近代的な政治意識に彼らは初めて目覚めた。ですからその意味では今回の運動は、一方のものがすごく古い体質の中国が顔を出し、結局それが勝っちゃった。世界は驚いています。

アメリカの世論は急遽八十パーセントが中国が嫌いになったという。今までは中国にはなんとか親近感をもっていた。今、日本で世論調査をやったらやっぱり同じような結果が出るでしょうね。それほどまでに、結局ひどい国じゃないかと、そういうイメージがあるわけですね。

そこで、ゴルバチョフ訪中。ですから基本的には経済政策をめぐって、原則派と保守派はちょっと一歩退潮しているわけですから改革派の間に対立があった。李鵬のような原則派が出てきて趙紫陽らの改革派がやり込められてきていたわけですね。それは一つには趙紫陽さん

にも責任がある。経済開放政策がさっき言ったようにうまくいかなかった。これが順調に推移して、皆が豊かになって、平等に経済がどんどん上向いていけば趙紫陽氏は非常に強い立場に立てたけれど、「何だお前がやったおかげで、こんなひどいことになったんじゃないか」と言われるもんだから、趙紫陽氏は非常に弱い立場にあったわけです。

そういう状況にあっただけに、趙紫陽氏は、なんとか巻きかえしを図らなければいけなかった。そして自分が留守をしている間に動乱という規定がなされて、いよいよ激しい抑圧が起るということも出てきていたからおさらです。

鄧小平・ゴルバチョフ会談

さてそこで、五月十六日の中ソ首脳会談。皆さんもあのテレビなんかで御覧になったと思いますが、私もたまたまこの間ずっとNHKの衛星放送でリアルタイムで解説をしてましたから、非常に

臨場感のある場面を覚えているんですけども、十六日の午前十時二十分から、鄧小平さんとゴルバチョフさんの世紀の会談が行われた。これはまさに大変な会談だったと思います。世界のスターゴルバチョフ氏も鄧小平氏の前ではまさに先生と学生、中国では先生のことを「老師」といいますね。「老師」の前の「学生」、学生のような雰囲気でした。そして、ここでの鄧小平発言により中ソ間の政府レベルの正常化及び党と党との正常化も行われたんですね。まさにこの鄧小平・ゴルバチョフ会談、予定を上回って二時間半も行われたこの対談がすべてであったわけです。

その午後には二時から李鵬さんとゴルバチョフさんの会談があった。これは政府レベルの会談ですね。そして夕方、確か五時をもう回っていたと思いますけれども、趙紫陽・ゴルバチョフ会談が引き続いて行われました。

このところで、一つの問題があったん

ですね。一つというか大変な問題が出てきた。まず一つはですね、あのようにな鄧小平がゴルバチョフと会談をして中ソ首脳会談を成功させた。普通だったら中国

の民衆は、「鄧小平さん御苦労さん、よくやってくれた」と、「世界のスターであるゴルバチョフを迎えて全然たじろかなかったじゃないか、堂々たるものだ」って言って拍手喝采するのが普通ですね。ところが広場の学生や中国の民衆は、全くそれと逆の反応を示した。この冷厳な現実を皆さん見ておく必要がある。全然違った反応だったんですね。「もうお前ひきさがれ」と言っただけです。政治改革にも意欲的なゴルバチョフのあの若々しきを見て、「何でお前が出てくるのか」っていうふうには言っただけです。この違いですね。確かに学生達は「護憲」ということを言いました。日本では護憲なんて言うのと、どうもちょっと手垢のついた革新政党のスローガンに聞こえますけれども、中国では初

めて護憲という非常に近代的な政治意識が出てきた。何しろ憲法や党規約に基づいた政治が行われたことがないわけですから。

そこで、「人治」に対して「法治」を言いましたね。人が治めるのに対して法が治める、法による政治をやってくれ、と学生達は、あるいは中国の民衆はゴルバチョフ氏との会談をやった鄧小平さんに対し、「お前はひきさがれ、お前は何者だ」って言ったんです。考えてみると鄧小平氏は、国家元首、つまり国家主席ではないわけです。政府の首相つまり國務院総理でもないわけです。党の書記長、つまり総書記でもない。何でもない人が中ソ首脳会談でも結局彼が全部牛耳っちゃったんですね。

彼は党中央軍事委員会的主席にしか過ぎないんですよ。党中央軍事委員会はあくまでも軍の統帥権は持っているけれども党中央に所属する。鉄砲が党を支配してはいけない、党が鉄砲を支配するんだっ

て言ってきたわけですね。もちろん、実態はまさにそれと逆だったことは、今回証明されたわけですから。そういう状況の中で、考えてみると、鄧小平さん

が今の中国を代表すること自体、憲法や党規約に照らせばおかしい。しかも鄧小平氏がかつて毛沢東時代の個人崇拜に悩んで、彼自身が規定した現行党規約においては、「いかなる個人も組織の上に君臨しているわけですね。そこを学生や市民が突いた。鄧小平にとってはものすごく痛いところを突かれたわけですね。「俺がこれだけやっているのに何を言うか」とこう思った。つまり鄧小平氏自身のワンマン体制、独裁体制の正統性の根柢が脅かされたわけでありました。

趙紫陽・ゴルバチョフ会談

そして、その日の夕方、これは私も色々なところに書きましたから皆さんも

御承知だと思いますが、大変なことが起こりました。趙紫陽さんとゴルバチョフとの会心の冒頭、趙紫陽氏は何と言ったか。この場面を中国のテレビは、冒頭の十数分を放映したんですね。それを意識して、冒頭から何といったかという、私も昨日ももう一遍自分でビデオを再現してみましたけれども、趙紫陽氏は、こういうことを言ったんですね。「一昨年の秋の十三期一中全会で鄧小平さんは引退しました。しかしながら我々には彼の経験と知恵が必要なんだ」と、彼からは離れられないんだということを言った。そして、「全ての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねられています。このニュースはあなたに初めて言うものです」って言ったんですね。これは大変な機密事項であり、そういう秘密決議があったわけです。それを中国共産党の最高指導者である趙紫陽氏が、こともあろうにソ連の首脳との会談において公衆の面前で暴露したんですね。これをどういう風に解釈

するか。私はたまたまNHKの衛星放送の解説をしていて、「趙紫陽氏は党の総書記ですから、彼が最高権力者であるにもかかわらず、ここまで鄧小平氏を称えなければいけないところに今の中国政治の体質がある」ことを述べながら、内心ギクリとしました。これは大変なことを言っているなと思いました。そのことしゃべろうかと思ったんだけど、NHKのしかもこれはアジア全域をカバーしている衛星放送だから、あまりスペキュレーティブな私の個人の主観的な解釈はやめておくほうがいいと一瞬思っただけなんですけども、これは趙紫陽が戦いを挑んでいるとこなんですね。その時の趙紫陽氏の表情を見ると、彼はカメラの画面に顔を向けるのではなく、ゴルバチョフを見ることができずに伏目がちにそのことを言っているんで、最後に左手をあげてここぞとばかり強く発言している感じなんですね。彼自身こんな機密を漏らせばどんな重要なことになるかということ

とは分かっているはず。それを党の総書記である彼がテレビの画面を通じて漏らした。その時ゴルバチョフさんは一瞬キョトンとしてちょっと下を向いたり、上を向いたりして、何を言い出さかってな感じだったのです。

趙紫陽氏はずっと党内で追いつめられてきましたから、それが表には今百万人の大衆がいる。そしてゴルバチョフが来て、ゴルバチョフは英雄として迎えられて、それ故に、彼は天安門広場にも行かないわけですね。その時に趙紫陽氏は、何とかこの大衆の力によって自分の立場を挽回しようと決断したのでしょう。私は当初ちょっと違う解釈をしていましたけれど、もう一遍ビデオでテレビの画面を見たり、その後の色々な状況証拠や情報を整理してみると、それが正しい解釈ではないか。

そして、翌十七日にはゴルバチョフ氏は北京で演説し、そして十八日には彼は上海経由帰国します。

戒厳令の施行

このあたりから北京では状況がますますシリアスになってきます。

十八日の夜から十九日の早朝になるんですけど、趙紫陽氏は学生の前に行って、「ここへ来るのが遅すぎた、あなたがたの言うことは当然だ」と言いまして涙を流すわけですね。それも皆さんテレビで御覧になっているでしょう。一方李鵬首相は学生とその日、学生代表と話し合いをやるけど決裂して、結局「お前達は動乱分子だ」という風に言いますね。趙紫陽氏は「ここへ来るのが遅すぎた」つまり一緒に戦おうじゃないかっていう立場に転じたのですね。それに気づいた党中央の当局の側は、この場合党中央は趙紫陽さんのはずなんですけれど、多数派の李鵬首相達は、「趙紫陽が大変なことを漏らした、反革命だ、党の機密を漏らした」といきりたってくるわけです。

人民解放軍の民主化呼応

ところが、ここにもう一つ重要な事故が起こります。やはり学生があれだけ北京にいて騒いでいるわけですから、ひょっとするとゴルバチョフさんやシュワルナゼ外相の身にどんなことでも起きかねない。そこで、北京を警備していたのは誰かという問題ですね。通常ですと北京は、いわば人民警察つまり公安、公安とは中国の場合は警察のことですね、それと人民武装警察部隊もありますし、首都の北京は「衛戍区」と言いますから衛戍区の部隊も守ってるわけですね。ところがゴルバチョフさんの訪中のための首都の警備は、いわば今度話題になった三八軍、人民解放軍北京軍区の三八軍に委ねていたわけです。

ところが、学生がますます李鵬打倒、鄧小平打倒を叫ぶという状況の中で、ゴルバチョフが北京を離れた後、つまり十八日以降は、この学生を排除する方向に

三八軍を向けようとした。ところがこの三八軍は、北京の近くにいたわけで、自分の息子もデモ隊の中にいるかもしれない。そしてほかの軍隊と違ってかなり最新鋭の技術化した機構化した部隊なんです。ですから、軍隊の中でも最も近代化した軍隊であり、それだけに「自分達は学生などに銃を向けたくない」と言い始めたのです。学生など排除したくないどころか一緒に戦って民主化に呼応し始めた。

そしてさらに、人民解放軍の総後勤部、それから党中央軍事委員会、これは鄧小平さんがトップにいるわけです。それからさらには人民解放軍の様々な部隊、例えば北京軍区の他の部隊、瀋陽軍区、蘭州軍区、それから党中央党校、こういう共産党の要のところ、さらに國務院の李鵬さんのもとにある各部、こういうところが一斉に民主化運動に呼応し始めたのです。そして、その問題をどうするかというので、十九日の夜八時か

ら、党中央政治局会議が開かれています。

そうした中で趙紫陽氏は一挙に挽回しようと思った、そして、追い詰められたのは逆に李鵬であり鄧小平であった。ところが、この政治局会議で、趙紫陽氏が軟禁状態に陥ったといわれています。これはかなり確度の高い情報です。それ以来彼はもちろん今日まで行方不明ですね。これが一つの転換であった。そしてその夜十一時から、北京市の党・政・軍の緊急会議が開かれる。ここで強行に反対派を押さえつけて、翌朝からの戒厳令施行なのですが、戒厳令が出る前に日本にも色々な情報ルートなどで伝わってきました。私のところも、たまたま十九日十一時頃になりますと電話が各方面からかかってきましたし、その前にもうそういう緊迫した状況が日本政府筋に伝わっている。そして二十日の十時に御承知のように戒厳令が施行された。

ということとは、一口に言うと、むしろ李鵬首相ら強硬派の人達の方が一時は追

いつめられていて、趙紫陽が学生達と一緒にに戦おうとした。学生達も何も趙紫陽を救うためではないけれども、もちろん改革派の方がよりベターですし、そういう意味では、一つの大きな渦ができたということだろうと思います。それまで追いつめられたが故に戒厳令という強行突破を図った。そうでなければ、あの首都の北京で何も戒厳令を公布する必要はないんです。もうこの頃は、つまりゴルバチョフ訪中は、だんだんデモの渦が退潮期になっていたわけです。それを敢えて戒厳令をやった。

動かぬ戒厳令と軍の入れ替え

さてそこで戒厳令の後、二十五日ぐらいまで学生達はデモを継続しますけれども、御承知のようにだんだんちりぢりになってきます。学生達も疲れてますし、それから学校も長い間休んでる。そして、皆交代する。今度大学に帰ってもつと地味にやろうというような、もう大体

これで済んだという気持ちだったと思いますね。確かに今回の運動を私は「四・五月革命」と言っているんですけど、初めて中国に近代的な政治意識に基づく一種の市民革命的、知識革命的な大きな運動の盛り上がりであった。ある意味では一九一九年の五・四運動に匹敵するよううなねりでしたね。ですからそれで終わるかと思われた。

ところが、御承知のように六月三日の深夜、四日の早朝一時四十分。一斉に天安門広場にいる学生達を銃撃した。

ここにもう一つのドラマがあったわけです。それは、まさに戒厳令を施行したからには一斉に軍を動かして一挙に突破しなければならぬにもかかわらず、なお軍が動かなかったということです。そして、御承知のように軍の長老の中にも「学生に銃を向けるべきではない」ということを言い出した人がたくさん出てきましたね。徐向前、聶榮臻、楊得志らの人達がそうです。

これは党中央にとっては大変な権威の失墜ですね。戒厳令を出したけれども、肝心の軍によってそむかれた。そこで、いわば鄧小平氏は戒厳令施行の直前からひそかに武漢に行きます。五月二十二日まで。そして武漢に行つて、北京軍区のように言うことを聞かない軍区ではなく、他の軍区の指令官を全部集めて、「絶対に俺に従え」、「俺が軍の統帥権を持つてゐるのだ」とやったのです。そして、二七軍という、本来首都から離れたところを警備しているはずの軍隊、しかも考えてみると、楊尚昆一味が握っている軍隊を鎮圧の第一線に引き出した。これはモンゴル人が多いっていうんですけれど、私がテレビで見ていたかぎりではモンゴル人じゃなくて中国人でしたね。いずれにせよ、武力鎮圧までには戒厳令がしかれてから随分時間がかかつてます。明らかに三八軍を中心とする北京の部隊を入れ替へてゐるわけです。そしてテレビでも出てきましたが、北京駅に着く軍人

が学生に説得されて動揺したりしてました。彼らは北京の実情を全然知らないわけですね。今中国でも地方に行くと、今回の事件が伝えられてないところがあるくらいですから。

ところが、そうであるが故に中国当局は今、黒を白と言いくるめて、「天安門広場では一人も殺していない。暴徒達に先に火をつけたんだ。先に人殺しをやったので、やむをえず正当防衛でやった」というような情報をしきりに流してまうけれども、しかしながらそれはもう今の中国の人達はVOAも聞いてますし、日本のNHKの短波放送も聞いてますし、騙せないと思いますね。そもそも銃を持った人達の方が負傷者が多くて、まるごしの市民や学生の方が負傷者が少ないなんていうはずはないんですけれども。そういう情報を流している。

そこで二七軍に加えてかなり他方から出てきた、北京の様子を知らない民主化なんか分からない、しかも幸か不幸か、

今人民解放軍もかなりまだ文盲率の高い、共産党でさえも八十パーセントが農民出身で中国全体の三分の一が文盲ですから、そういう状況の中でかなり質の悪い兵士が先兵をさせられたという気がしますね。そして伝えられているところによると、五月が終わつて六月になるころから「天安門広場には今流行病がはやってる、もの凄い流行病だ」という情報が流されていた。この間中国の人達は肝炎の時にはパニックを起こしましたけど、噂や迷信にまだ弱いところがある。ましてや地方から来た軍人。「流行病がはやってるから」と皆興奮剤を打たれたというんですね、予防注射だと称して。色々分析してみますと起こってはいけないようなことがまさに起こつてゐるわけですね。

それはやはり、あそこまで武力弾圧するというのは、もうメンツを崩され潰され、鄧小平体制としても危なかった。そして軍がなかなか動かずに、最後まで北

京軍区などは抵抗したわけですから、こういうことが食うか食われるかの権力闘争とともに、まかり間違えば鄧小平氏自身がマルコスのように石をもたれて後ろから追われかねない。彼はものすごく恐怖があったと思います。文化大革命でもやられた、天安門事件でもやられて、自分が反革命罪といわれたわけです。あの毛沢東体制の末期ですね。今度やられたらもう二度と自分には明日はない。しかも最後のにやられるかもしれない。それは絶対に許されないという感じで彼は居直ったんだろうと思いますね。そもそも、自分に反逆する者はすべて「反革命分子だ」という気持ちがありますから、そういう感覚で「動乱」とか「反革命暴乱」と規定をした。そして彼は、「暴徒だ、暴徒だ」って言ってるうちにですね、本当にそういう風に思ってくるんですね。だから、「暴徒は打ち殺せ」っていうようなことになってくるわけですね。そういうかたちで自己陶醉し

て、あの悲劇が起こっているわけであります。それを一斉にやった以上は、毒を食らわば皿までで、「徹底的に自分達の方が正しい、そして天安門広場では一人も殺してない」と。中国紅十字会でさえも、その日の内に二千六百人が殺されたと言っている。数千名という数字もありますが、正確には死者の数も分からない。鎮圧後は全部きれいにしちゃって死者の数もわからないようにしてるといふことは、二重の意味で今日の中国の当局は犯罪的だと私は思います。

中国再生の道のり

残念だったという悲しみの気持ち、やむをえなかったんだという痛切な表情でこの事態を收拾するならともかく、鄧小平がこの六月九日に出てきた時には、カラカッと笑って何食わぬ顔で笑って平然として、自分達の一族、つまり強硬派を揃い踏みさせていましたね。普通の神

経ではとてもできることじゃない。そして「悪いのはみんなあの暴徒達で、一斉に彼らを捕まえろ」というかたちで今恐怖政治が始まってるわけでございます。

しかしながら私は、先程申し上げましたようにポスト鄧小平というようにことを含めて考えると、こういう体制が長く続くとは思えません。今度は意外に早いんじゃないか。これで何年もつだらうかという気がします。そして、一度目覚めたあの学生達の意識というものは、こういう強行措置が続けば続く程、ますます沈黙し逆に広がっていくだろうと思います。

世界に広がる中国人社会の

共感と同情

今度の運動をみると非常に特徴的なことは、初めてのことだと思えますけれども、大陸の中国の状況を心配する中国人社会の共感と同情の輪が非常に全世界に広がってゆきましたね。香港にも。香

港の人達は従来自分達のことしか考えない、いざとなれば逃げられるってことを考えていたにもかかわらず、あの五百五十万の人口の内二百万がデモに立ち上がった。何処に集まったかと思ったら、

あのハッピーバレイの競馬場をうめた。大丸デパートのある近くのビクトリア公園をうめた。そして、テレサ・テンなんかが歌唄って、皆感涙にむせんだろうですけれど、香港の人たちも一体となっていてすね立ち上がったわけです。台湾の人達もそう。台湾の大学生達もスローガンを掲げる。東京にいる台湾から来た人達も大陸の学生と一緒にデモに行く。横浜の中華街でも、ニューヨークでも、ロンドンでも、もちろんあるいは広島とかあちこちの日本の都市にいる留学生達も立ち上がったんですね。それはもう台湾人か香港から来た人か、大陸から来た人かの区別なく皆が一緒になってこの問題にかなり共感したということですね。初めて中国人が新しいアイデンティティを求

め始めたという点でも、問題は大きいと思いますね。

芽生えた中華思想からの脱却

そういう意味では、初めてこういうニューウェーブが生まれて来た。今回の非常に不幸な出来事を通じて、中国人自身が鄧小平さんのようにどんなことをやっても外の世界はかまうなというあの中華思想から脱却しなければいけないんですが、そのような芽が出てきたことの意味は非常に大きい。それには革命第一世代、あのマンダリン官僚って言うでしょうが、もう煮ても焼いても食えないようなしたたかな自己中心主義と事大主義と中華思想、そういうものがやっぱり崩れていく、崩れていけない限り、当面中国の近代化はできないと思いますけれど、その時代がもう間もなく来るのではないかと思います。そうした時に初めて中国の人達はずっと開かれた状況になっていくでしょう。今度、私のところにい

る留学生なんか聞いてみると、例えばチベット問題がある。チベットだって戒厳令下におかれて、チベットの人達はラマを中心に漢民族の支配に抵抗してるんですね。従来はやはり「自分達は中国の民主化を求めるけどチベットのことはやはり漢民族が中心になって治めなければ」なんて言っていた人達が多かったですけど、今度は「やっぱりチベットのこと自分達は考えなければいけない」と、そういうかたちになってきました。

自分達の民主化は求めるけど中国の少数民族の抑圧に対しては知らん顔ってことではやっぱりだめなんだという新しい意識が中国人社会の中に出てきたということ、私達は長期的には考えておく必要があると思います。

例えば台湾は大陸中国に比べるとものすごく経済も社会も安定し、発展してますね。学生デモの間にも「台湾の経験に学べ」というスローガンが出てくる。そのことの影響がかなり長期的には大陸を

洗い流していくでしょう。あるいは香港はどうなるのか。このままいくとあと八年後の返還にもかなりの支障をきたすと思いますし、ひょっとするとイギリスも強い姿勢になるかもしれません。

私は中国の人達がもっと寛大になって、漢民族の社会は色々な漢民族社会がありえてもいいんだ、台湾地域もあってもいいし、香港地域もあってもいいし、チベットはチベットで一つの連邦制をつくってもいいぐらいのところまで寛大になつていかなければ、とても今のような状況だけで中国をまとめていくことは無理だと思います。そういうことを考えると、新しい中国人像が一方で芽生えつつあるんじゃないか。それと自分達とはとにかく権力を握って革命やつたんだからという既得権、そして絶対に自分達が正しいというあの古いタイプ、そういうものが今まさに時代のせめぎあいの中で問われている。当面は古いタイプが勝ってしまったんですね。また同時に最終的に軍

を握っているものがいかに強いのか。日本は幸いにしてこういう社会にありますけれども、皆さんちょっと考えてみてください。日本の社会でもし共産党だけが権力をもっていて、全部共産党が牛耳っていて、議会などはせいぜい村議会ぐらいしか選挙する自由もない。しかも議会はほとんど意味がない。すべてが共産党で、ちょっと反対を言えば検挙される。

新聞にも報道の自由がない、と仮定してみてください。今度は当初はみんなマスクミが一斉に立ち上がりましたね。皆さんのところにも日中親善協会ですから『人民中国』がきているでしょう。『人民中国』でさえ学生達に大変共感を示しました。これからはだめになります、五月三十日頃まではそうですね。ということはいかに言論の自由がないか。もし日本がそういう社会であったらどうかってことを考えた時に、日中友好ってことは言うは易いんですけども、ものすごい違った社会の中に彼らがいたのだという

ことを、そして日本という国の、ある意味ではおめでたい現状を色々言う人もいますけれども、やっぱり自由とか民主主義というものの尊厳というか、それは大事だってことを改めてかみしめられたのではないかと思います。

そういう意味では、今回の事態は、実に色々な問題を世界に投げかけました。私は長期的にみれば、これで中国共産党の一党独裁体制が崩れていく第一歩が始まったとみています。ひょっとするとこのまま恐怖政治を続けたりしていくということになる、それは中華人民共和国解体につながりかねないんじゃないか。こういう政治は長くもたない。そして中国共産党は多くの中国の民衆の民心を全く失っているわけですね。「今国民党が来て、もし自由な選挙が行われたら、共産党への支持よりも国民党の方に圧倒的に支持が起るだろう」という中国の学者も出てきてるぐらい共産党は民心を失ってしまいました。であるが故に、権力に

しがみつき強権的な発動をしたんでしょ
うね。

そういうことからすると、長期的にみ
るとまだまだ状況は予断を許しませんけ
れども、いずれにしても私は中華人民共
和国解体への一步を踏みはじめているん
じゃないかと思っています。それほどまでに
今日の事態は異常である、ということをも
最後に申し上げまして、私のお話を終え
たいと思います。

どうも御静聴ありがとうございました。

《追》今回の出来事と中国の将来に関し
ては、尚、近刊の拙著『中国の悲劇』
（講談社、一九八九年八月刊、千三百
円）を参照願えば幸いです。

講師略歴



中嶋 嶺雄（なかじま みねお）

一九三六年 松本市生まれ

一九六〇年 東京外国語大学中国科卒

一九六五年 東京大学大学院国際関係論課
程卒

一九六六年 東京外国語大学に奉職し、助
手、講師、助教授を経て

一九七七年 教授、現在にいたる

一九八八年 東京外国語大学海外事情研究
所所長を兼任

【専攻】 国際関係論／現代中国学／アジ
ア地域研究

【学位】 社会学博士／国際学修士

（主要著書名）

『中国現代論』（一九六四）、『中国像の
検証』（一九七二）、『中ソ対立と現代』
（一九七八）、『北京烈烈（上・下）』（一
九八一、サントリー学芸賞受賞）、『香港
移りゆく都市国家』（一九八五）、『中ソの
戦略・日本の選択』（一九八八）など

本稿は、平成元年六月二十
日、広島グランドホテルで開
催された広島県日中親善協会
主催講演会の記録です。

文責＝編集室